

“Lord Jim” 論

玉 木 清 孝

(文理学部英文学研究室)

On “Lord Jim”

By

Kiyotaka TAMAKI

かつて私は「贖罪の文学」なる題目の小論（高知大学学術研究報告第10巻人文科学第3号）で、Joseph Conrad (1857~1924) の代表的な作品である“Lord Jim” (1900) を採り上げ、「贖罪」の倫理こそ Conrad 文学の有する大きな信条であり、彼の人生観の根底を貫く道義感であることを立証しようと試みた。このような考えは今も変わっていないが、この小論では前記の論文で触れることのできなかった Jim の“romantic”な性格を中心に彼の人間像を究明し、併せて彼を破局に追い込んだ真の原因は何であるかを考察してみたいと思う。

後年、マレー人が畏敬の余り Tuan Jim (Lord Jim) と呼んだ Jim は Essex の田舎牧師の次男坊として生れたが、早くから海の生活に憧れ、危険と冒険との世界に自己の英雄的な姿を夢見ていた。

He saw himself saving people from sinking ships, cutting away masts in a hurricane, swimming through a surf with a line; or as a lonely castaway, barefooted and half naked, walking on uncovered reefs in search of shell-fish to stave off starvation. He confronted savages on tropical shores, quelled mutinies on the high seas, and in a small boat upon the ocean kept up the hearts of despairing men --- always an example of devotion to duty, and as unflinching as a hero in a book. (1)

やがて、ある冬の嵐の夜、練習船の近くで衝突事故が起り、Jim の待望していた瞬間が訪れる。しかし、荒れ狂う波を見ると Jim の両脚はすくんで動けなくなり、その間に救助艇は去ってしまう。この不測の事態を直視するどころか、残忍な自然の激昂が彼に不意討をくわせたことに憤りさえ覚え、今に真の勇気を必要とするような事態が発生した時こそ……と、Jim は秘かに巧名心と冒険欲とを燃やす仕末であった。

数年後、「紳士的で、着実で、従順で、自己の任務に関する完全な知識を備えるに至った」Jim は、東洋に向かう途中猛烈な暴風雨に遭遇し、落下してきた円材で負傷したため止むなくシンガポールの病院に入院する。退院後 Jim は、八百人の聖地巡礼団を乗せてメッカに向かう「古墳のような老朽船」Patna 号に、一等航海士として乗船した。紅海の入口に達するまでは、その航海は順調そのもので、Jim の人生航路を根底から破壊する運命が前途に待ち伏せているとは夢想もできなかった。ところが、突如 Patna 号は難破船と衝突し、忽ち船首艙から浸水し始める。

“Eight hundred people and seven boats --- and no time! Just think of it.” (2)

“He was not afraid of death perhaps, but I’ll tell you what, he was afraid of the emergency. His confounded imagination had evoked for him all the horrors of panic, the trampling rush, the pitiful screams, boat swamped --- all the appalling incidents of a disaster at sea he had ever heard of.” (3)

一方、New South Wales 出身のドイツ人で、「熱帯地方随一のデブ」の船長とか、アル中の機関長とかは離船準備に懸命で、乗客のことなど眼中になかった。ところが、甲板から下のボートに飛び移ろうとしていた補助機関員が心臓麻痺のために急死したことも知らずに、下のボートにいる連中はなおも激しく絶叫する。

『跳び降りろ、ジョージノ跳べノ跳び降りろノ』

その瞬間 Jim は、まるで奈落の底へ跳び降りるように、甲板から跳躍した。それは殆んど無意識的な行為であった。またも魔の一瞬が、不意に Jim に襲いかかったのだ。折りから丁度、音もなく上空を蚕食し始めたスコールの黒雲が、悪魔の仕組んだ巧妙な罠であるかのように Jim は跳んだ。それは、悪魔の誘いに Jim の「闇の奥」が、突如としてその醜悪な実体を暴露したかのようであった。

“The lights did go! We did not see them. They were not there. If they had been, I would have swam back --- I would have gone back and shouted alongside --- I would have begged them to take me on board. . . I would have had my chance.”⁽⁴⁾

だが、スコールの中で沈没したものと全員が信じて疑わなかった Patna 号は、意外にも漂流中をフランスの砲艦に発見されて、アデン港に曳航される。かくして、「死者を欺くにも等しい」彼等四人の背信行為は、東洋のある港の警察審判所で審判に付されることになる。しかし船長はこの重大さを知ると遁走してしまい、機関長と二等機関士は口実をもうけて入院したので、Jim 一人が全責任を負って被告席に立つのである。その結果、Jim は船員資格を剥脱され、少年時代から夢の舞台でった「海の世界」から追放される。船員学校の練習生当時、不意に襲いかかった恐怖心のために苦渋を味った Jim であるが、Patna 号事件こそ其の勇気を発揮して、自己の功名心と冒険欲とを満足させる絶好の機会であったのだ。にも拘らず Jim は、より汚辱的な形で再びその機会を失ったのである。事件後 Jim は、終始この事件の鋭敏な観察者である Marlow 船長に絶叫する。

“Ah! what a chance missed! My God! what a chance missed!” he blazed out; but the ring of the last ‘missed’ resembled a cry wrung out by pain.⁽⁵⁾

その後 Jim は、まるで Patna 号の亡霊から逃避するかのようには東洋各地の港を放浪し続けるが、Jim の自負心は彼が一ヶ所に永住することを決して許さなかった。何故なら Jim はどういうわけか、自らが自己に対して抱いている幻想を正当化したい気持が非常に強かったので、少しでも汚辱の過去の風評を耳にすると、雇主に短い書置きを残したまま姿を消すのであった。そのような転職が十数回も繰り返された後、Marlow 船長は、東洋各地で手広く貿易業を営むドイツ人の富商 Stein に Jim の件を相談した結果、彼の助言によって Jim を Patusan へ送ることになる。Patusan は、オランダの保護領であるさる土侯国の辺境にあり、海岸から 40 マイルも奥地にある上、周囲の深い密林によって外界から完全に隔絶された「地下 20 フォート」の世界であった。Marlow は Jim に、Patusan に潜む危険性を強調するが、彼は全く意に介せず、再度の機会到来に狂喜して、

“I’ve been waiting for that. I’ll show yet --- I’ll --- I’m ready for any confounded thing --- I’ve been dreaming of it --- Jōve! Get out of this. Jōve! This is luck at last. --- You wait. I’ll ---”⁽⁶⁾

Patusan に赴いた Jim は、先ず、奥地の種族を煽動して横領や略奪を欲しいままにしていた Sherif Ali 一派を奇計をもって討伐し、その結果、それ迄圧政の限りを尽していた Rajah Allang

も波々ながらも Jim に服従するようになる。かくして Patusan では、Stein の親友であるダギス族の酋長 Doramin の統治下で、平和と秩序とが回復されたのである。二年後、Marlow が Patusan を訪問した時、Jim はこの地方の実質上の支配者となり、原住民の信頼を一身に集めていわば神格的な存在と化していた。Marlow の眼にも、『Jim はもう少しで自己の運命を征服しそうに思われた』程成功し、殆んど過去の亡霊から脱却したかに思われた。しかし、残忍で狡猾な海賊である Gentleman Brown 一味が食糧を強奪するために Patusan を襲撃したことから、突如として Jim の破局が訪れるのである。その時偶々奥地を旅行中であった Jim は急を聞いて部落に帰り、狭い入江をはさんで両者は対峙することになる。しかし所詮、この対決も『運命の女神が、あらかじめその結果を知りながら冷ややかな眼差しで眺めている最も悲惨な決闘』にしか過ぎなかったのだ。何故なら Brown は彼の選んだ犠牲者の弱点を嗅ぎつける悪魔的な本能を備えていたので、彼の炯眼は忽ち Jim の過去を見抜いて、

“Have we met to tell each other the story of our lives?” I (Brown) asked him (Jim).

“Suppose you begin. No? Well, I am sure I don't want to hear. Keep it to yourself. I know it is no better than mine. I've lived and so did you though you talk as if you were one of those people that should have wings so as to go about without touching the dirty earth. Well --- it is dirty. I haven't got any wings. I am here because I was afraid once in my life. Wait to know what of? Of a prison. That scares me, and you may know it --- if it's any good to you. I won't ask you what scared you into this infernal hole, where you seem to have found pretty pickings. That's your luck and this is mine --- the privilege to beg for the favour of being shot quickly, or else kicked out to go free and starve in my own way.” (7)

更に Brown は Jim に、『両者が白人という「共通の血」と、「共通の経験」と、「共通の罪」との秘密の共有者である』ことを暗示して、彼に汚辱に満ちた過去を再び想起させるのだ。その結果、Jim はいつもの冷静な判断に失敗を犯し、夜明けと共に Brown 一味が武器を携帯したまま退却するのを許してしまう。しかし、凶暴な復讐欲に燃える Brown は、退却の際に卑劣にも裏水路から河口の陣地を急襲し、酋長 Doramin の一人息子であり、また Jim の無二の親友でもある Dai Warris と、彼の部下を多数殺戮した後海上に遁走したのである。運命の女神は再度 Jim に脊を向けたのだ。

He had retreated from one world, for a small matter of an impulsive jump, and now the other, the work of his own hands, had fallen in ruins upon his head. (8)

生命を賭して住民の安全を保障した Jim は、この責任をとるために Doramin の許へ出頭し、亡友の亡骸に別れを告げた後、『僕は悲しみにふさがれて来た』『僕は覚悟を決め、武器を持たずに来た』と云う。老族長は、腰をかかめた芥添の青年の頭に左手をまいて寄りかかり、拳銃を持つ右手をゆっくりと持ちあげて Jim の胸板を射抜いたのである。

He passes away under a cloud, inscrutable at heart, forgotten, unforgotten, and excessively romantic. Not in the wildest days of his boyish visions could he have seen the alluring shape of such an extraordinary success! For it may very well be that in the short moment of his last proud and unflinching glance, he had beheld the face of that opportunity which, like an Eastern bride, had come veiled to his side. (9)

Jim を完全な破局に追い込んだ海賊 Brown は、臨終の床で Marlow に、悪意に満ちた歎言の

声で Patusan の経緯を話すのだ。Brown は最初の一瞥で、Jim の自信に溢れた平然たる態度に反撥を覚え、この正義と理想の権化のように振舞っている男の鼻をあかしてやろうと固く決心したのだ。だから Dain Warris の率いる守備隊を背後から急襲したのも、Brown にとっては冷酷残忍な裏切り行為ではなく、Jim に対する復讐と教訓とを意図していたのだ。それ故、Brown のたったこの暴虐行為の底には、ある種の優越感が流れているのに我々は注目しなければならない。実際 Brownこそ「Jim が廃棄した世界」の手先きであり、執念深いネメシスの密使に外ならないのだ。

しかし我々は、Jim の破滅の原因を唯 Brown にのみ帰することが出来るであろうか。確かに直接的な原因は Brown の出現に存するであろうが、その前に我々は Stein の指摘した如く、Jim の“romantic temperament”について考察してみる必要がある。

Jim の件で相談に訪れた Marlow 船長に対して、Stein は

『私にもよく分るよ。その青年はロマンティックなんだ』『その男はロマンティックなんだ——ロマンティックなんだ。それはとてもよくないことだ——とてもよくないことだ……しかしまたとてもよいことだ』と述べると共に、次のような一見あいまいな忠告をするのである。

“A man that is born falls into a dream like a man who falls into the sea. If he tries to climb out into the air as inexperienced people endeavour to do, he drowns — nicht wahr? . . . No! I tell you! The way is to the destructive element submit yourself, and with the exertions of your hands and feet in the water make the deep, deep sea keep you up. So if you ask me — how to be?”

“I will tell you! For that, too, there is only one way.”

“That was the way. To follow the dream, and again to follow the dream — and so — ewig — usque ad finem. . . .”⁽¹⁰⁾

Stein の指摘を待つ迄もなく、このような Jim の特質は、すでに少年時代から見られるものだ。船員学校時代、突発的に襲いかかった恐怖心のために遭難船救助に失敗したにも拘らず、Jim は現実を直視しようとしなければかりか、暴風雨の中で救助に成功し、仲間達から英雄視されている友人を侮蔑の眼で眺めながら、次の機会を待望して功名心と冒険心とを燃やしたのではなかったか。また、八百人の乗客を見棄てて Patna 号からボートに飛び降りた時も、Jim は『僕は跳んだ……らしい』『どういうわけか、そうなったんだ』と云って現実直視を回避している。更に、審判後過去の風評を気にして東洋の各地を放浪するのも、多くの夢想家に共通して見られる Jim のこのような自己中心的な性格のためであったと云えよう。過去の亡霊から脱却するために Patusan へ赴こうとする Jim の決意でさえ、どこか夢想的な傾向があるのを感じとることが出来るのだ。二年後 Marlow が Patusan で Jim に会った時、彼は殆んど Patna 号での跳躍行為を償うと共に、少年時代から夢想していたあの「機会」を十中八九迄手中にしたかに思われたのである。しかし、Brown によって二人の「共通の血」と「共通の経験」と「共通の罪」とを指摘されると、忽ち Jim の自信は崩壊し、過去の亡霊の虜と化してしまうのだ。もし Jim が、Patna 号での背信行為を直視し、人間性に潜む怖ろしい「闇の奥」を率直に認める人間であれば、再度の失敗は犯さなかったであろう。

このように考察してみると、Jim を破局に追い込んだ原因は外的には Brown であるが、内的には自己が過去の汚辱行為の主体者であることを認めようとしないう Jim の頑迷な自我主義であり、自己中心的な夢想癖であったと云えるだろう。

最後の「機会」にも失敗した Jim は、Doramin の秘蔵息子 Dain Warris が殺された責任を完

うするために、彼を愛する娘 Jewel の手を振りきって老族長の許へ出頭するのである。彼の死は、再び Patusan を指揮者のいない荒廃に導くのは明白であるのに、Jim は『幻にも似た「理想の行為」という花嫁と無情な結婚式を挙げるために、生きた女から去って行くのだ。』

げに、Jim の短い人生は“romanticism”に貫かれた生涯であったと云えよう。

(注)

- (1) Joseph Conrad: Lord Jim (J. M. Dent & Sons Ltd., 1955) p. 5
- (2) Ibid., p. 64
- (3) Ibid., pp. 64~65
- (4) Ibid., p. 99
- (5) Ibid., p. 61
- (6) Ibid., p. 173
- (7) Ibid., pp. 281~282
- (8) Ibid., p. 301
- (9) Ibid., p. 306
- (10) Ibid., pp. 156~157

(昭和45年9月25日受理)

